

日本臨床外科学会 国内外科研修報告

兵庫医科大学炎症性腸疾患外科での研修を終えて

福島県立医科大学消化管外科

叶多 諒

この度、日本臨床外科学会国内研修プログラムに参加し、2023年11月6日から12月1日までの4週間、兵庫医科大学炎症性腸疾患外科において研修させていただきました。

医師7年目となりましたが大学卒業後より福島県内で研修を行っていたため、他施設で行われている診療や手術手技について幅広い知見を得たいという思いから、今回の国内研修を希望しました。炎症性腸疾患に関する診療経験が不足しており、その分野に対する苦手意識も理由の一つでした。炎症性腸疾患の患者数は今後も増加が予測されており、またその分野は高度な専門性が求められています。自施設でも炎症性腸疾患の手術は行われていますが、年間数症例のため、兵庫医大のような国内有数の症例数を誇る施設で洗練された技術を学びたいと考え、この研修を選択しました。

研修の内容としては手術見学、病棟回診に参加させて頂きました。研修初日は緊張もありましたが、医局の雰囲気がとても良く、教授を含むスタッフの皆さんが和気藹々としていて、すぐにうち解けることが出来ました。一方で、手術が始まると一気に緊張感が高まり、圧倒されました。池内先生のパワフルな指導とそれに応えるスタッフの方々の掛け合いがとても印象的でした。

手術は4週間ほぼ全ての症例に助手として参加させて頂きました。一つひとつの手技が定型化され、細部にわたるこだわりを感じました。4週間でUCのIAA、Crohn病の狭窄、瘻孔による腸管切除、緊急手術（Crohn病の消化管穿孔、高齢発症、重症UCのHartmann手術）、Crohn病の痔瘻に対するシートン法やダルバドストロセル投与など自施設ではなかなか経験できない様々な症例を数多く学ぶことができました。特に、回腸嚢作成時のポイント、Crohn病の軽度狭窄病変の切除適応の判断の仕方が参考になりました。またIAAの際には、会陰操作で助手として間近で拝見できたことは貴重な経験となりました。若手の教育にも力を入れており、若手外科医が執刀時には手術後に短時間でビデオを見直し、手術の進行における考え方などを共有し改善点を話し合う場面もあり、とても有意義な時間を過ごすことができました。

病棟では、月曜日から木曜日は池内先生がスタッフと一緒に回診を行いますが、教授自らが患者さんとコミュニケーションをとり、一人ひとり聴診をするなど丁寧に診察し、さらには回診時に学生への教育も並行して行っていたことが記憶に残っています。大腸全摘IAA後のafferent limb syndromeなど稀な合併症にも触れることができたことも勉強になりました。また、近隣の県だけではなく、中部地方や四国地方などの遠方からも多くの患者さんが紹介され、数多く集まってきていることには非常に驚きました。兵庫医大が提供する質の高い医療が患者さんからも高く評価されていることの表れだと思いました。

研修期間中はスタッフの皆様が大変親切に頂きました。診療時間以外には夕食、サウナなどに誘っていただいたり、歓迎会を催していただいたり大阪・神戸の街の魅力を教えていただき、勤務時間以外も充実した4週間を過ごすことができました。

あっという間の4週間でしたが、この研修を通じて手術時の技術や知識、考え方だけでなく、教育の重要性も再認識する良い機会となりました。今回の経験を自施設での診療にも活かせるよう、さらに努力して参ります。最後になりましたが、このような素晴らしい機会を与えていただきました。日本臨床外科学会会長の万代恭嗣先生、国内外科研修委員会委員長の高山忠利先生、また、研修を快く引き受

けてくださり、ご指導賜りました兵庫医科大学池内浩基先生、炎症性腸疾患外科の皆様には深く御礼申し上げます。4週間という長期の不在をお許しくださった福島県立医科大学消化管外科学講座の河野浩二教授、医局の皆様にもこの場を借りて感謝申し上げます。



(池内先生、スタッフの方々との懇親会)